

# 慢性腎炎・腎不全の疫学に関する研究

## 「当科での腎不全の治療成績について」

鳴 海 福 星

佼成病院小児科

### 【序言】

慢性腎不全の進行因子を見出し、それを除去する方法を検討する目的で、現状の末期腎疾患児の実態を調査した。

### 【対象および検討項目】

対象は東京女子医科大学腎臓病総合医療センター小児科で末期腎不全の治療を行った、15才以下の男児31例、女児32例である。

検討項目は(1)原疾患発見時の主訴、(2)透析療法導入時年齢、(3)原疾患、性別の導入時年齢、(4)透析療法児の経過、(5)持続透析期間、(6)腎移植までの期間である。

### 【成績】

(1)原疾患発見時の主訴で頻度が高いのは、浮腫と集団検尿での尿異常であり、以下顔色不良、低身長、血管性紫斑病の徴候、生下時よりの異常、多尿、発熱などであり、その他手足のしびれを主訴とする患児もみられた。(表1)

(2)透析療法導入時年齢をみると10才以降は男児が増加し、5才以下では女児の導入例が多く、さらに乳児期に4例の患児を透析療法へと導入した。(図1)

(3)原疾患、性別の導入時年齢をみると、糸球体腎炎による導入例は8才以降に多く、遺伝性あるいは先天性腎疾患では0才にピークがあり、それ以降はばらつきがみられる。全身性疾患の内訳は、HUS、HSPN、SLEである。泌尿器科的疾患とした、両側膀胱尿管逆流症や神経因性膀胱での導入例はすべて6才以降の小児であった。腎炎と全身性疾患にともなり腎疾

患症例は全導入例の52%を占めていた。(図2)

(4)透析療法児の経過。血液透析(以下HD)は55例に持続性腹膜灌流(CAPD)は8例に行なった。HD児の55例中29例に腎移植(生体腎20例、死体腎9例)が行われ、現在19例が良好な腎機能を維持している。一方、再透析を余儀なくされた9例と未腎移植児26例の内、6例が死亡している。またCAPD児8例のうち2例に生体腎移植を行なったが、残り6例中3例は死亡した。(表2)

(5)持続透析期間は4年未満の症例が多いが、8年以上透析療法を続けている症例もいる。

(図3)

(6)腎移植までの期間は生体腎例は3年未満が多く、死体腎例は期間に差がみられなかった。

### 【考察】

慢性腎不全の原因としては糸球体病変を主とする疾患が全体の半数以上を占めており、いわゆる慢性腎炎の早期発見の重要性が示唆された。また主訴でも集団検尿での尿異常者が多く、集団検尿の意義は大きいものの、現行の制度を改正する必要もあると思われる。

末期腎不全の治療としての透析療法は本邦でも広く普及しているが、小児の成長・発達・社会復帰状況などを考慮すると腎移植にまさる点はない。血液型の不一致やリンパ球抗体の存在などによって生体腎移植ができない小児例も多く、死体腎提供者の増加が望まれる。

### 原疾患発見時の主訴とその頻度

(CRF 63例)

	%
1. 浮腫	27
2. 集団検尿での尿異常	25
3. 顔色不良	17
4. 低身長	6
5. 紫斑・腹痛・関節痛	6
6. 生下時よりの異常	5
7. 多尿	4
8. 発熱	4
9. その他	6

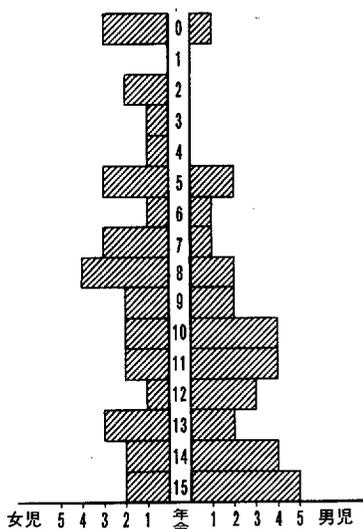
(表1)

### 慢性腎不全児の原疾患 (63例)

導入時年齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
腎炎	M						1			1	4	1	1	2	1	3
	F		1			1		3	1			2		2		2
先天性	M	1				2							1		1	1
	F	3	1	1	1				1	1		1				
全身性疾患	M									1			1			1
	F					1								1		1
泌尿科的疾患	M								1	1			2			1
	F							1		1						
不明	M									1						1
	F						1	1	1		1				1	

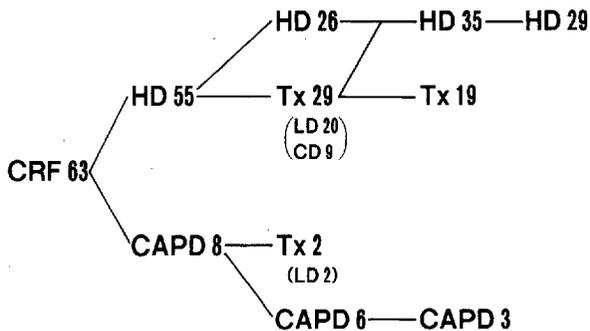
(図2)

### 透析療法導入時年齢 (63例)



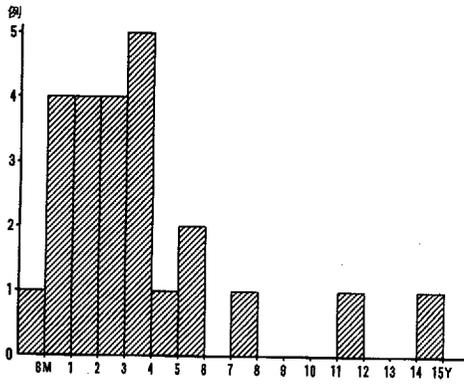
(図1)

### 慢性腎不全児の経過



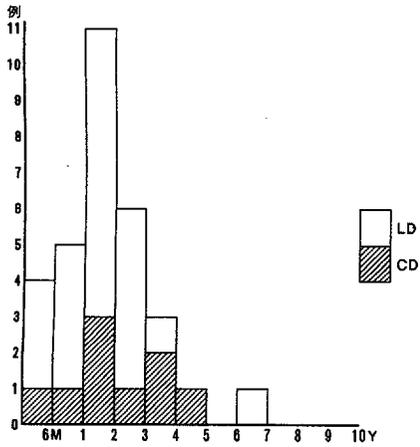
(表2)

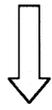
未腎移植児24例の治療期間



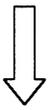
(図3)

31例の腎移植までの期間  
(LD22, CD9)





**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【序言】

慢性腎不全の進行因子を見出し、それを除去する方法を検討する目的で、現状の末期腎疾患児の実態を調査した。